



# 田尻さくら通信

**別紙**宮城県田尻さくら高等学校 〒989-4308 大崎市田尻沼部字中新堀 137 <https://tajiri-hs.myswan.ed.jp>

令和6年1月13日(土)、大崎市田尻文化センターで行われた「たじり青少年意見発表会」に、本校から2名の生徒が参加しました。ここでは、その発表の本文を掲載しますので、ぜひ御覧下さい。

## 人生の波

田尻さくら高校 S

僕はパキスタンという国に生まれ、12歳までパキスタンに住んでいました。初めて日本に来たのは2010年でした。初めは言葉も分からず、自分はどんな世界に入ってしまったのかな、と思いました。僕は仙台にある七郷中学校へ入学し、毎日行くようになりました。ただ、学校には通っていますが、何も分からなく、言葉の壁がとても厚いな、と感じていました。それでも友達を作れるように、みんなと仲良くしました。友達ができてちょっとずつ日本語も分かるようになりました。学校の中ではパキスタンの学校と違う、日本の文化など、色々な事を学びました。だんだん学校生活が楽しくなりました。

学校に通い、半年が経ちました。ある日、まさかのことが起きました。それは、大きな地震でした。自分の人生の中で初めての地震でした。2011年3月11日、大きな地震と津波が起きました。僕はその時、自宅にいました。あの時はすごく怖かったです。僕は父に言いました。「自分たちの国に帰りましょう。」そして、父に言われたのは「自分たちは逃げる場所があるけれど、日本人は逃げられないでしょ。だから、私たちも同じ人間だから、みんなで頑張りましょう。」ということでした。父の言葉を聞き、自分も頑張れる自信が出てきました。津波が起きた後、たくさんの人が亡くなって、自分たちの生活もどのようになるか心配でした。今でも思い出すと悲しくて涙がとまりません。それでも助けてくれた日本人たちや、パキスタンのおばさんたちの励ましのおかげで、家族で乗り越えました。

人生にも色々な波がやってきます。人生にはいいことも、悪いことも、悲しいことも、大変なことも、様々な事があります。ただ、それをどのように乗り越えるかによって、考え方が変わります。津波の後、大和町という町に引っ越しました。そして、大和中学校に転校して、半年勉強して、無事卒業できました。本当であれば高校に行きたかったのですが、高校の授業料が払えなくて、高校には行けませんでした。なので、四月から仕事することに決めました。僕にまた人生の波が来ました。色々な仕事を探しましたが、なかなか見つからず、大変でした。ようやくセブンイレブンでアルバイトをすることが決まりました。初めての事で、とっても大変でした。僕はまだ16歳で、学校で勉強する年なのに、仕事を手に入れてしまいました。でも、僕にはやっぱり目標があったので、それに向けて毎日頑張っていました。

僕の目標はお金を貯めて学校に行くことでした。コンビニのアルバイトだけでは足りなかったため、18歳になるとトヨタ紡織でも働きはじめました。日勤、夜勤の両方があり、大変でした。仕事を始めると僕の心はまだ子供なのに大人の仲間になってしまいました。仕事をしているうちに、たくさんのことを学んだからです。社会のルールなり、接客の態度なり、一步一步、僕は大人の階段を登りました。16歳から23歳まで仕事を続けました。約7年間かけてお金を貯めました。

2021年4月、僕はついに田尻さくら高等学校に入学しました。待っていた人生の波が来ました。初めはとても緊張していました。24歳の高校生ですが、自分より10歳ほど年下の人達と一緒に勉強することを一度も恥ずかしいと思ったことはありません。僕は仕事をしてから高校生になりましたが、年は関係なくいつでもどこでも、勉強したい気持ちと、やる気があればできると思います。今僕は三年次の生徒です。この二年半の学校生活は、とても楽しかったです。高校に入って、いろんなことにチャレンジしました。イベントの実行委員になったり、文化祭でパキスタン料理のお店を出したり、バドミントン愛好会に入ったり、スポーツ祭に参加したり。たくさんのお金を自分から進んでおこない、どんどん学んでいきました。自分にとって、高校生活は学ぶことがたくさんありました。もちろん悩みもありました。高校では単位を取らないと、卒業できません。テストで点数が取れるのか、長くて難しい日本語を読んで、勉強できるのか、とても心配でした。でも分からないことは先生に聞きながら授業をうけて、テストも頑張りました。悩んでいる時は、誰かに相談することが一番大切だと思います。

人生には多くの問題があります。これからの自分の人生には、どんなことが起きるのかわかりません。でも、僕は安心です。なぜかという、そばに相談できる人達がたくさんいるからです。問題が解決しないときは、家族に相談したり、仕事の上司に自分が困っていることをアピールしたりして、いい方法を教えてもらい、問題を解決します。高校でもチューターの先生や、周りの先生たちが、自分が困ったときに助けてくれます。クラスの友達みんなにも感謝しています。僕の人生ではこの高校生活がずっと心に残るだろうと思います。僕は今でも仕事を続けながら高校生活を送っています。働きながら高校生として勉強できるうれしさや、そばにいる人達への感謝の気持ちをより感じる事ができています。日本に来てから人生の波を乗り越えて、僕はチャレンジを続けてきました。これからも、何歳になっても、チャレンジを続けたいと思います。



私の高校生活は、三年生から始まった。2020年4月のある日の事。中学校を卒業し、田尻さくら高校に入学した私はその日初めて高校の授業を受けた。数時間の授業を受け特に何事もなく一日を終えた。初対面の人とも普通に話しをすることができた。そして記念すべきその一日を終えた帰りの電車で、心地よい疲労感を覚えながら「明日はどんな日になるんだろう」気がつけばそんな事を考えていた。楽しかったのだ。そしてそんな毎日が始まるはずだった。初登校の翌日、私は学校に行かなかった。

次の日の朝、どうしてだろうか、身体が動かなかった。楽しみだったはずなのに、行かなければならないと分かっているのに。

それから二年間、私はほとんど学校に足を運ぶことはなかった。今から始まる充実感あふれる学校生活に胸を躍らせていたはずなのに。何を間違えたのか。どうすれば良かったのか。答えが出ないまま、新品の定期券は役目を終えていた。

何もしない日々が続く、無駄な時間を過ごし、ただめくられていくカレンダーを見つめる日々だった。先生からは何度も電話がきた。「調子はどうだ?」「元気にしてるか?」何度も家に来てくれて、プリントを届けてくれた。時には電話口で涙を流してくれたこともあった。そういつかことがある度に、私は何度も学校に行こうと思い、何度も「次は行きます」そう言った。でもその言葉とは裏腹に時は過ぎても状況は変わらなかった。「最低」だとよく分かっていた。期待と苦勞を踏みにじり、口だけの自分が、それが私のダメなところであり、嫌いなところだった。分かっているのに変わらない。それが本当にいやだった。何度も自分を追い詰め、傷つける。時には明日は行けるかもしれないと自分に期待し、その期待を自分で裏切り絶望する。いつしか心が崩れていくような気がした。音を立てず、ゆっくりと確実に。理由のない不登校に自分はいらだちと共に、嫌気がさす、そんな毎日の繰り返しだった。

そして、高校生活三年目の4月、初登校から二年が経ったこの日、私は覚えている限りでは初めて自分の意思で学校に行った。本当に気まぐれだったのか、それとも年齢からくる焦燥感だったのか、それは今でも分からない。

朝、学校へ向かう途中の電車から見えた空が、今にも泣き出しそうな空で、まるで自分の心を映しだしているようだった。その空が自分の背中を押してくれたのかもしれない。そして二年ぶりの学校。たった一日しか来ていない校舎に迷子になりつつ、なんとか教室までたどり着くことができた。教室の扉の前、ガラス窓から見える見ず知らずの生徒。その楽しそうに話す声を聞き、胸が早鐘を打ち、吐く息は震えていた。この扉を開けたとき、もし教室の空気が変わったらどうしよう。さっきまでの話し声が消えたらどうしよう。そんな想像が頭を駆け巡った。扉を開ける。その一つの動作が1分にも1時間にも感じられた。

もう帰りたい。何度そう思ったことだろう。だけど、この一瞬を逃したら…。次のチャンスはまた二年後なのだろうか…。もしかすると二度と訪れないかもしれない。

ふと思ったその考えが、私の手に無意識に扉を開けさせた。一瞬だった。1分でも1時間でもなかった。扉の向こうでは、先ほどと何も変わらない景色だった。私は少しぼんやりとした意識のなか教室に入り、座席表を確認し、自分の席へと座った。ふと周りを見渡す。もちろん誰の顔も知らない。そこには談笑するグループや、一人でスマホを眺めている者、先生と趣味の話しをしている者もいた。

よかった。誰も自分のことなんてみていない。気にしていない。そう思うと少しだけ安堵できた。同時に、少しだけ寂しさを感じた。この普通の教室に、たった一人になったような気がした。全ては自分が蒔いた種なのに。

そんな中、一人の生徒が近づいてきて、私の前までやってくると、にこにことした微笑みを浮かべて、「転校生?」と聞いてきた。私は「いや違うよ。実はずっと来ていなかっただけで、一年生のころからいたんだよ」と返した。彼は「ほんと?名前は何?」と聞き、名前を告げると彼ははっとした顔で、「懐かしい!久しぶりだね!」と明るい顔でそう言った。その時私は、素直に嬉しかった。二年前のことを覚えてくれる人がいるんだ。あんなたった一日の、たった数時間一緒にいただけなのに。自分の存在を肯定してくれたような気がした。彼のその言葉と顔を見て私は、もう大丈夫だと思った。きっとこれからも上手くいく、そう予感させてくれた。

それから私は、失った二年間を歩き直すように毎日学校に行った。苦手な数学に苦勞しながら、分からない英語を聞き取りながら、茶道で一服し、陶芸で作品作りにいそしんだ。国語でいい点を取った時には本当に嬉しかった。初めて学校行事にも参加することができた。私は初めて学校生活を楽しみ、罪悪感のない休日を謳歌できた。初めて自分自身を褒めてあげることができた。そして、初めての登校日から三年が経ち、ふと今までの学校生活を振り返ってみて、少しだけ分かったことがある。不登校の理由について、これまで何年も答えが出せなかったその問いに、いまなら少しだけ答えが出せる。私は怖かったんだなと気づいた。学校という空気感、世界観が。羨ましかったんだと思う。いつも輝いていて、楽しそうな人たちが。

そして、「生き方」について分かったこともある。行動しないと何も始まらないこと。行動してみると、案外なにも怖くないこと。人前で発表したり、意見を言ったりしてもいいんだという事を。不完全だからこそ人間であると。はたから見たら無駄な二年間だったと思われるかもしれない。しかし、それに気づけたのもこの不登校の二年間があったからこそだと今ならそう思える。

今後もし、また心に雨が降った時、どうするだろう。傘を差して歩いても、道ばたの紫陽花を見るために立ち止まってもいい。気まぐれで傘を閉じてみて、雨に打たれてみるのも悪くない。人それぞれの選択が、人それぞれの道がある。でも全て、自分自身で決めることだ。今私は学校に言って良かったと心からそう思える。あのとき学校に行ってみようとした選択が、勇気を出して開けた扉が、私にとって最大限に大きな「初めてで」「始まり」だった。

自分の心情をただ話しただけに聞こえるかもしれない。でもこれが去年から始まった私の高校生活での体験である。そしてこの当たり前が今の幸せなのだ。

